

指揮 橘 直貴 TACHIBANA, NAOTAKA

札幌市出身。桐朋学園大学音楽学部でホルン専攻として入学。同大学卒業後、研究科に進み、同大学の附属機関である指揮教室に在籍する。指揮を岡部守弘、紙谷一衛、黒岩英臣の各氏に、ホルンを安原正幸氏、チェンバロを故鍋島元子氏に師事する。また、大学在学中より、シエナ・ウィンドオーケストラに入団、1995年4月まで同団のホルン奏者を務める。大学卒業後から現在に渡り、ウィーン国立音大助教授である湯浅勇治氏の指揮セミナーに参加、師事する。1999、2001年 ウィーン・マスタークルゼ指揮マスターコースにてサルヴァドール・マス・コンデ氏に、2000、2003、2004、2006年 イタリアのムジカ・リヴァ夏期国際アカデミー指揮マスターコースにて、イザーク・カラブチェフスキー氏に、また2001年ドイツのシュレスヴィッヒ・ホルシュタイン音楽祭指揮マスターコースにてヨルマ・パヌラ氏に師事する。2001年第47回ブザンソン国際指揮者コンクールで聴衆賞受賞。同年に、オーケストラ・レジオナル・ドゥ・カンヌと、2006年のサンクト・ペテルブルグ・フィルハーモニーと共演。2007年、第2回バルトーク国際オペラ指揮者コンクール優勝。これまでに、東京交響楽団、東京シティフィル、東京室内管弦楽団、札幌交響楽団、仙台フィル、広島交響楽団、関西フィル他に客演。現在、各地のオーケストラ、合唱団やオペラの指揮者として活動している。

<http://www3.snowman.ne.jp/~tachibana/>

◎今回の演奏会を迎えるに当たりまして、下記の先生にもご指導頂きました。

この場をお借りしまして御礼申し上げます。

新 真二氏（大阪フィルハーモニー交響楽団 コントラバス首席奏者、アンサンブル・ベガ メンバー）

鈴木豊人氏（紀尾井シフォニエッタ東京 クラリネット奏者、アンサンブル・ベガ メンバー）

小椋順二氏（京都市交響楽団 ホルン奏者）

曲目紹介

「どうして交響曲にそんな子どもの歌を使うの？」と思われるかもしれません。この曲が作られた時代の人々にはどうして理解することができませんでした。その謎を解くヒントになるのが、マーラーがこの楽章に付けたタイトル、「カロ風の葬送行進曲」。カロとは、フランスの版画家、ジャック・カロ(Jacques Caro, 1800-1900)のこと。そして、マーラーがこの楽章を作るにあたってインスピレーションを得たと言われているのが、この絵、「狩人の葬送」です（カロの作品ではないという説もありますが）。狩人に狙われる立場の動物たちが、逆に狩人の葬送をしているという、アイロニカルな作品。厳かな葬送行進曲の中に、たのしげな動物たちのおしゃべりが聞こえてくるようです。



抒情的な中間部で用いられているのは、「さすらう若人の歌」の「彼女の青い瞳が」のメロディ。疲れた旅人が菩提樹の下で見いだした安らぎについて語っているこの曲は、この葬送が菩提樹の下の墓地で終わることを暗示しています。

第4楽章「嵐のように運動して」2分の2拍子・ソナタ形式

第3楽章から休みなく続くこの楽章は、「寝ている人も起こしてしまう(?)」シンバルの1発とともに始まります。荒々しい弦楽器の叫びから、トランペットとトロンボーンが主題の冒頭を力強く演奏します。この楽章でしばしば登場する強弱の変化は、何度も地獄に打ち勝とうと戦い、天国の領域に到達しようと懸命にもがいている様子を表しています。マーラーの言葉を借りれば、「主人公と勝利のモチーフはその頭に運命の一撃を繰り返すくらい、彼が自分自身に打ち勝ち、第1楽章の主題とともに青春時代のすばらしい回想が再び出現した後に、死のうちにはじめて勝利を獲得する」のです。マーラーはこの楽章を、伝統的なソナタ形式から逸脱し、地獄を表す短調で始め、それと対照的に天国を象徴する二長調で終わらせている、ということにも注目です。

マーラーは、芸術の究極の目的は「苦しみからの解放とその超克である」と語っています。この楽章は、まさにその象徴といえるでしょう。

山口 宰 (CONTRABASS)